

---

# 悩める少女と魔法薬

黒猫ふろー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悩める少女と魔法薬

### 【Zコード】

Z2927F

### 【作者名】

黒猫ふろー

### 【あらすじ】

宿屋のお手伝いをしているパナのもとに、妙に印象的な男女2人が訪れる。話を聞いてみると、2人はなんだかワケアリのようで・・・。ラブコメじゃないラブコメです

## カラソーローン

宿屋『踊る小鹿亭』の入り口につけられたベルが、今日も誰かの来訪を告げる。

受付で店番をしていたパナは、音にうられてあどけなさの残る小さな顔をひょいとあげた。

「あつ、ギフおじさん。こんにちは」

「おつ、パナちゃん。今日も頑張ってるな！」

入ってきて右手を挙げたのは、3軒隣に住んでいる顔なじみのおじさんだった。

「お父さんは中にいるかい？」

「いますよーいま、厨房で料理の仕込みをやっています」

「そうか。じゃあパナちゃん、ちょっと上がらせてもいいかな」

「はいどうぞ~」

このおじさんは八百屋を経営しており、いつもお店に新鮮な野菜を運んできてくれる。

きっと今日も、この宿に卸す野菜の品数を、父に相談しに来たのだ

受付の小さな椅子に腰掛けたまま、パナは厨房に消える大きな背中を笑顔で見送った。

\* \* \* \* \*

パナは、この村に住む10歳の女の子だ。10歳といえばまだまだ幼い部類に入るだろつ。彼女から発せられるあどけない雰囲気もそれを表している。

のんびりとした性格の持ち主だが、5歳のころから続けてきたお店の手伝いはそろそろ堂に入つてきて、最近ではこうして短い間なら店番まで頼まれるようになつてきた。

もちろん、これくらいの年齢の子供なら、まだまだじつとしているよりも体を動かしているほうが楽しい時期だろう。パナも例外ではないが、でも彼女はこうして受付の机に座つている時間も結構気にいつていたりした。

家（宿屋）から聞こえてくる父や母、お姫さんたちの息遣い。ドアの向こうからもれてくるたくさんのにぎやかな音。

窓から覗く人々の賑わいと見慣れた町並み。

広がる青い空。落ちていく夕日。

そのどれもをぼんやりと、あるいは興味を持つて眺めるこの時間が

パナは大好きなのだ。

カラソロロン

パナがそうやって受付でいつものよつこのんびり時間を過ごしていくと、不意に入り口のベルが鳴つた。

「いらっしゃいませ」

パナは笑顔で客を出迎えた。

扉から姿を現したのは10代後半と思われる男女2人。顔に見覚え

がないので、おそらく旅の人だろう。

2人のうち女の人人は、燃えるような赤い髪を持つ印象的な少女だつた。思春期から大人への変貌を遂げるちょうどその境目の時期にいるような特有の雰囲気をもつ彼女は、意思の強そうなくくりくりとした瞳をまっすぐ前に向けている。ウェーブのかかった髪の色に合わせたケープを羽織つており、シンプルながらもセンスのよさそうな雰囲気を漂わせていた。

一方、男の人は、小麦色の髪にどび色の瞳をもつた、なんともやさしげな顔立ちをしている青年だ。外套を羽織つただけの服装には特に何も特徴はないが、背が高くすらっとしたスタイルのよさが、ただのズボンと上着といった服装を不思議と格好よく見せていく。顔立ちに派手さはないが、彼の持つ雰囲気は周囲の空気を和らげるだろうと容易に想像できる。

・・・と、そこまでパナが思つたかは定かではないが、どちらも整つた顔立ちをしていることは間違ひなかつた。

(うわあ、恋人さんかな)

2人の並んだ姿はまさに一枚の絵のようだ。

10歳ともなればすこしませてきて恋愛に對して興味があつても当たり前。

いらっしゃいませ。お泊りですか？2人の関係を勝手に想像してしまい、妙にどきどきしながらもパナは接客をはじめた。

「ええ、部屋を2つお願いしたいの。空いてるかしら」

すつと透るような声で少女がいつ。

「はい。部屋をお2つでよかつたですか？よかつたら2人部屋のほ

「いつも空いてますが」

言つてから、パナはしまつたと感じた。

理由はよくわからないが、父親から『よほどのことがない限り、部屋の種類や数については口出しをしてはいけないよ』、と謂われていたことに気付いたからだ。

パナに言わせれば2人部屋のほうがお金も安いし良いと思うのだが、とにかくいけないことらしい。

やはり言つてはまずかったのか、それを聞いてお姉さんのほうはすこしあわてたみたいだった。

「いえ！1人部屋を2つでお願いします」

「僕は2人部屋でもかまわないよ？」

今まで後ろで待つていたお兄さんのほうが口を開いた。

「フレデリク！ちょ・・・、」「」の人のいつ」とは聞き流していください。部屋は2つで

「なんで？2人部屋のほうがお金もかからないし、経済的だろ？僕はかまわないけどな」

この言葉に、お姉さんは勢いよくお兄さんのほうを振り向く。

「私のほうがかまうのよー今あんたと一緒にいたら、心臓がいくつあつたつてたりないじゃない。1分1秒でも離れてたいの！」

「僕は君と一緒にいられてすごくうれしいけどな。こうじている間にも僕の心臓こそ高まりっぱなしなのに」

目の前の青年が繰り出した、聞いたこともないような甘い言葉に、

横で聞いていたパナは思わずポカンと口を空ける。

それはお姉さんも同じだった。

翻つた赤い髪がぱさりと動きを止めた。

「なつ・・・・、何を言つてゐの……！」

子供の前よー？あんたは今正氣を失つてゐる状態なんだから、軽々しくもそんな恥ずかしい台詞をいわないでちょうどいい……！」

あわてたお姉さんの抗議にも、お兄さんは「！」吹く風だ。

「僕はいたつて正氣だよ、アンジエリーカ」

フレデリクと呼ばれたお兄さんは、お姉さんの華奢な肩をつかんで自分のほうに向かせた。

熱いまなざしを送るお兄さんの姿に緊張したのか、お姉さんの後姿は抗議の姿勢をしたままカチコチに固まつてしまつてゐる。

その姿が、まるでこれからキスでもするかのよつて、（わやあつ）と声には出さずパナはひとり顔を赤らめた。

そのままゆつくり、お姉さんの赤い髪にお兄さんの小麦色の髪が重なつたをしたとき、

はつと我に返つたお姉さんが、お兄さんの体を力いつぱい引き離した。

「フレデリクのバカエロ親父――――ツ――――！」

バチーンッと激しい音が響き渡る。

部屋は2つとるつたら2つ取るの！いいわね！？

早口でまくし立てるお姉さんの勢いに押され、今繰り広げられた出

来事や田の前にノギるお兄さんの姿に睡然としながらも、「で、で、は、」こちらの記帳にお名前を記入くださいー・・・と、パナはなんとか自分の役割を遂行したのだった。

## 第1回（後書き）

作者が甘い言葉になれてないのでもちやくちやく恥ずかしかった・・・  
(苦笑)

宿屋の1日はそれなりに忙しい。  
(近所の子たちとちやつかりしつかり遊びながらも、) 夕方は夕方  
でいろいろやることがある。

父にいわれて外の倉庫に暖炉用の薪を探りに行つたパナは、薪を運  
ぶ途中に、先ほどのお姉さんが宿の庭にたたずんでいるのを発見し  
た。

(そういえば、さつきのお兄さん、大丈夫だったのかなあ)

思い出されるのは、やはり先ほどの倒れている青年の姿である。  
あの平手打ちは結構良い音がでていたけれど、大丈夫だつただろう  
か?

お姉さんの風になびく赤い髪に引かれ、何とはなしに視線を向けて  
しまう。

お姉さんは特に何をするでもなく、ただ庭先で風に吹かれる植物を  
眺めているようだった。

時折「ふつ。」と大きくため息をついて、目線を下に下げている。  
庭先を見つめる瞳は悩ましげだ。

(・・・何か悩んでいることがあるのかな。)

心配になつたパナはいても立つてもいられず、思い切つて「大丈夫  
ですか?」と声をかけてみた。

「あなたは、たしか」の・・・」

突然の来訪者に、お姉さんの印象的な瞳が見開かれる。

「はい。すみません、声かけるのもどうかなって思つたんですけど」

なんだか悩んでるみたいに見えたので。

そう告げると、それを聞いたお姉さんの顔がきょとんとしたものに  
変わつた。まさか心配されるとは思わなかつたのだろう。  
パナを見つめる瞳がやがて笑いに変わつた。

「あ、ははは。まさかあなたみたいな、何歳?」 「10歳ですー」  
「10歳の子に心配されるなんてね。」

よつほど変な顔してたにちがいないわ、とお姉さんは笑つた。

「でも10歳にしてはずいぶんしつかりしてるのね」

「つづはホラ、宿屋ですか。言葉遣いだけはみつちりと仕込まれ  
ましたー。」

へえ～そつなんだ、と感心してみせるお姉さん。

「最初の話に戻しますけど、お客さん、なにか悩まれてるんですか?  
よかつたら話してみてくださいです。何か話すだけでもすつきりす  
る」とあるよ、つてお母さんが言つてました。」

じこつと真剣な目でみつめる。子供特有の「あああ逃がさないぞ」と  
でもいいたげな瞳だ。

その瞳を困つた様子でしばらく見ていたお姉さんだが、やがて  
パナの熱意に根負けしたかのように、お姉さんは肩を落とした。

ふっと口元に笑みを浮かべる。

「そうね。・・・じゃあちょっとだけ、かわいいお嬢さんに話をし  
てみようかしら。

改めて自己紹介するわね。私はアンジエリーカよ。あなたは？」

「パナです」

「パナね。・・・ねえパナ、さつきは変なやり取りを見せてしまつ  
てごめんなさいね。ビックリしたでしょ？」

「はい。ビックリしました」

たしかにビックリしたので、正直に言つ。

「あいつって名前、フレーテリクって言つんだけど、その悩みの種つ  
てこうのがあいつのことなのよ。」「

うーん、何から話せばいいかなあ、とアンジエリーカは言つた。

「私はゴルトの町で薬屋をやつているんだけど、実は、裏で魔法薬  
のほうも取り扱ってるんだよね」

\* \* \* \* \*

魔法薬。

それは、普通の薬とは違い、その薬効に魔力が含まれているものを

言つ。

背が伸びたり縮んだり、若返つたり年をとつたりと、普通の薬ではおおよそ期待できないうなすばらしい効果が得られる、まさに「魔法」の薬なのである。

魔法の使えない一般人でも飲めば魔法の効果が得らるるだけあって、その作用と魅力に欲しがるものも多い。そのため取締りなども厳しくなり、価格も非常に高価となつてゐる。また、材料に特殊な素材が必要だつたり、作業工程に何らかの魔術的な要素が必要であつたりと、何かと作るのが難しいことも特徴だ。それに加えて、魔法薬を作ることができる魔法薬師の人数が、少ないといわれる魔法使いよりもさらに少なものもあり、それらすべてが価格を上げることにつながつてゐた。

つまり、市場に出回ることが少ない、貴重で高価な薬なのだ。

まあ、そんな細かい事情を幼いパナが知るはずもなく、「とにかくす」「い薬だ」という認識しかできていなかつたけれど。

「でも本業……つてわかるかな？普段やつてているのは薬屋さんのほうで、必要なときにしか魔法薬は作らなかつたんだ。作るのが面倒だつたし、材料もなかなか手に入らなかつたし、規制も多かつたし……、何かといろいろ大変でさ」

その辺の愚痴はまあいいとして、トアンジェリーカはペロリと舌を出した。

「ついこの前、貴族に作つて欲しつけてたのまれて、魔法薬を作つたんだけど……」

\* \* \*

それは、3日前のことだった。

1月前に貴族から依頼された魔法薬が完成したのだ。

「やつとできたー・・・」

完成させたアンジエリーカは、薬を小瓶につめるとそのまま店の奥にあるソファーに倒れこんだ。

何しろその薬は最終工程の段階で、昼は暗闇の中、夜は液面に月を写しながら3日3晩鍋をかき混ぜ続けなければいけないといつややこしい代物。

しかし、魔法薬を作るには魔術的な要素が必要なため、他に魔術師のいないコルトの町では誰かに頼ることもできないのだ。つまり、3日間ほぼ不眠不休で彼女は鍋をかき混ぜ続けたといつことになる。ソファーに体重を預けたアンジエリーカは、体中にたまる疲れを感じながらぼんやりとした頭で考えた。

（取り掛かってから2週間、か。やつと薬が完成したあ・・・。）  
（後は瓶にしつかりとした封をつけて、リボンもつけて箱に入れて・・・。）

（リボンは何色に、しよう・・・かな。効果が落ちないよう・・・に、保護魔法もかけなきや。）

（この1週間は・・・お店、閉めてたから・・・・掃除もしなきやいけないし・・・、在庫の整理もして・・・。）

いろいろ考えてこりつむかひびきそのまま寝てしまっていたらしい。

それからこくべくか時間が経ち、店のほうから聞こえてきた声で、アンジエリーカはわずかに意識を引き上げられた。

「アンジエリーカ、アンジエリーカ、いないの？」

「ひづから自分でよんでいるらしい。」

（・・・だ、れ・・・？）

「ああ、ううううんじやないか。こんなところで寝ていたら風邪をひくよ。」

少しして、ぱか、と体に重みを感じた。毛布か何かをかけてくれたようだ。

「・・・しばらく店を閉めていたようだつたけど、まだどこかの山にでも薬草をとつにいってたのかな。」

すいぶん疲れているみたいだし、とつぶやく声にアンジエリーカは聞き覚えがあった。

「・・・フレ、デ・・・リク・・・？」

名前を呼んだ自分の声は、寝起き特有のかすれたか細い音がした。

「・・・起にしちやつた？アンジエ、うめん、早めに咳止め用の薬を飲んでおきたいんだ。取つていつていいかな」

アンジエリーカは目を閉じたまま小さくうなづくと、かけてあった毛布を引き寄せて丸まつた。

足音が遠ざかる。壁を隔てた店舗スペースのほうで、「…」と何かを探す音がかすかに聞こえた。ときおり、「…」と乾いた音も聞こえてきて、空咳をしているんだろうと予想できる。

たしかこの青年は、生まれつき気管支が弱く、こつも店から薬を買っていたような気がする。

（また、喘息がはじまつたのかな…）

ぼんやりとした意識の中でそんなことを思つた。

再び眠りに入らうとした中で声がかかる。

「…」ねん、探したけどみつからないんだー。「ホ、どうある…？」  
（…・・・むー・・・・…）

眠くて眠くてたまらないときにおこる睡眠の妨害は、時に気分を苛立たせる。「」のときのアンジュリーカがまさにその状態だった。寝させてよ、とイラつきながらアンジュリーカは毛布にくるまつたまま呟んだ。

「もう一つ、受付の真ん中にある瓶に入ってるわよ。勝手に取つてけばいいでしょー。」

そのまままた眠りの世界に入ろうとする。

ほとんど眠っているに近いアンジュリーカだったが、しづらしくして「あ、これ？」といえがした。

「へえ。瓶が変わったんだね。前のよりずっとおしゃれな感じがする。色もピンクがかってきれいだし。ちょっとこれを飲むのはもつたないかも……。」

と聞こえたところでゴホゴホッ、ガハッと大きくフレデリクは咳き込んだ。

店舗スペースの壁を越えて、ヒュー・ヒュー、とか細い呼吸が聞こえる。どうやら発作が始まってしまつたらしい！

今すぐ助けに行かねばならない状況だが、しかしアンジエリーカは重たく動かない思考の中で、フレデリクの言葉に何か引っかかるものを感じた。

（“へえ。瓶が変わったんだね。前のよりずっとおしゃれな感じがする。色もピンクがかってきれいだし……”）

(それって……)

それってまさに、さつきまで作っていた魔法薬の特徴ではな  
いか・・・！？

『受付棚の上の中』を先指すという図式に気がついた！

そこにおいてあつたものとは・・・

ナニカニ・・・ツ！-！-！

眼鏡が一気に叩き飛ばされ、手元をばたき飛ばして床舗へ転がる。彼女は、へ向かう。

部屋を出たアンジエリーカが目にしたものは、苦しそうにうづくまるフレデリクと、床に転がる魔法薬の瓶だった。

横たわるクリスタルカットの小さな小さな小瓶。

本来なら淡いピンク色をした液体が、木製の床に広がり黒くしみをつくりつていた。

この薬独特の甘い香りが部屋一面に広がっている。

「そんな・・・」

その光景を田の当たりにしてしまったアンジエリーカには、文字通り、これまでの苦労がすべて流れていってしまった気がした。

この2週間の工程と苦労がめまぐるしく浮かんでは消え、頭の中を駆け巡る。

薬を飲まれてしまうことに対する危機感を抱いていたのだが、思つた以上に薬が使えなくなつたショックは大きかつたらしい。薬が駄目になつてしまつた、とそのまま床にへたり込みそうになる。

思考が停止しかけたアンジエリーカだったが、フレデリクの「ゼヒュー、ゼヒュー」という荒い呼吸ではつと意識が引き戻された。そうだー！ ひつしてゐる場合ぢやないー！

（急がないとーー）

店の棚から『気管支拡張剤や咳止め薬など、必要と思われる薬を急いで取り出す。

水に溶かすものは溶かして、粉のまゝはそのまま。

幸い薬ならたくさんある。

喘息に必要な薬をいくつか『えでていぐ。

これはどうだろ？

これは効果があるのか

早く収まつて・・・つ

・・・・・・・・。

•  
•  
•  
•  
•  
○

症状がある程度おさまったころには、時刻はゆうに半刻をすぎていた。

ふう、と息をつき、彼の頭の下に枕を差し込む。

フレデリクは意識こそなかつたものの、すうー、すうー、と穏やかな呼吸をしていた。外の雑音とあいまつて、お店の中に音を刻んでいる。

・・・本当に、よかつた。

その様子を見たアンジェリーカは、そつと胸をなでおろした。

いつの間にか夕方になっていたのか、差し込む西田が店内を照らしていた。

ひとまず落ち着いたアンジェリーカの目の端に、ふと、何か映りこむ。

アンジェリーカは立ち上がりつてそれを拾い上げると、手の中で口口と転がした。

「・・・あーあ。また作り直しかあ。」

西田を受けてきらめく小さな小瓶。

魔法薬は、落ち方が悪かったのかそのほとんどが床に零れ落ちていた。

垂直に持ち上げても傾けても、瓶のそこにはほんのく、3滴程度しか残っていない。

床にこぼれた分は非常に心に惜しかったが、まさかそれを回収して

渡すわけにもいかないだろう。

また、材料を集めるとこからやり直すしかない。

（そして3日かけて調合して、4日かけて煮込んで……。）

工程を考えると頭が痛くなる。

でも、頭を抱えなければならない現状なのにどこか落ち着いていられるのは、フレデリクの発作を止めることができてよかつたと本気で思っているからだろう。

瓶を片付け、こぼれた薬液をふき取り、使った喘息の薬は余った分を薬包紙に包みなおす。

自分ひとりでは力が足りないためフレデリクは床に寝かせたままだつたが、一連の出来事の後片付けは一通り終わつたはずだ。

自分用に入れたお茶を飲みながら、アンジェリーカは魔法薬をもう一度作るための計画を立て始めた。

今回作つたときに材料は余分に仕込んであるものも多いから、大体はそれを使うとして。

銅の小鍋と魔力充填用のローズクオーツは新たに買い足さなくちゃいけないだろう。

期間内に純水も大鍋3杯分は精製しておかなければならぬし。そして問題は、月下草だ。

今回は依頼された貴族に用意をしてもらつたが、自分の落ち度で薬を駄目にてしまつたからには、自分で探しに行かねばならないだろつ。

クレアリー・ビーの蜂蜜とローズマリーは大量に必要だけど、探しに行つてている間に注文すればなんとか間に合つ。

（その辺のことも考えて、必要な日数を計算すると……。）

必要な工程を思い返すアンジエリーカ。

計画表とこりめつこしていると、不意に背後からガタ、といつ音がきこえた。

振り返ると、部屋の入り口にフレデリクの姿が。どうやら田が覚めたようだ。

「あ、フレデリク。気分はどう?」

「・・・・・・」

声をかけたが、しかしフレデリクからは返事がなかつた。心なしか彼のどび色の瞳はすこしゆれているようにも見えた。まだ体調が戻っていないんだろうか?

「フレデリク?」

どうかしたんだろう?とソファーから立ち上がる。するとフレデリクはハッとしたかのよつに体を揺らし、視線を少し外側に向けた。

「ア、アンジエ・・・。君が助けてくれたんだね。あの・・・その、ありがとう。」

「ううん。そんなことはいいのよ。それより、もう大丈夫なの?」

「うん、もう全然平氣だよ。・・・君のおかげで、アンジエ」

ところが、どうも様子がおかしい。フレデリクの目線は妙に熱っぽいといふか、熱に浮かされているような感じなのだ。

「なんだか変な感じね。熱でもあるんじゃない?」

といってフレデリクの額に手を伸ばす。一瞬彼は固まつたようだが、アンジェリーは気にせず高い位置にある彼の額に触れた。手を当ててみたが、微妙な体温の違いはよくわからないものだ。

「うーん。熱いといえば熱い気もするけど、よくわからないな・・・。体温計でちゃんと測ってみる？解熱剤だそうか？」

「ううん。大丈夫だよ。」

そういうつて彼は自分の額に伸ばされている手をとつた。

そして、次の瞬間、フレデリクの行動に彼女は衝撃を受けることになる。

あろうことが、フレデリクはアンジェリーカのその手をそつと両手で握りこんだのだ！

突然の彼の行動に理解ができない。

「アンジエリー・カ・・・・」

尚も熱く自分の名前を呼ぶフレデリク。

彼女は頭の中が真っ白になつて、あわてて いるのに体がカチカチに固まつて動かなかつた。

「アンジェリーカ・・・。本当にありがとう、君は僕の命の恩人だよ。感謝しても仕切れないくらいだ」

「い、い、い、い、やいやいやいや……！そんな」と私全然からわないんだから……！」

だから手を離して——！！！と心の中で全力で叫ぶが、その叫びは残念ながら彼には通じなかつたようだ。

強いまなざしでまっすぐアンジエリーかの瞳が見つめられる。

「ううん、このお礼は是非ともさせて欲しい。そうじやなきや僕の気がすまないんだ」

手をぐつと引かれる。気づいた時には彼の腕の中にすっぽりと納まっていた。

悲鳴とも呼べぬ悲鳴を上げるアンジェリーク。

じたばたともがくも、華奢な彼女のことだ。所詮体格差で勝てるはずもなく、却つてきゅ、と抱き寄せられてしまつ。

金魚が心臓にならぬたいに鼓動が無い 血液が巡流していくと思えるほど身体があつく、妙な汗までかいている。

アンジエリーはパニックになつた頭で必死に考えた。

普段のフレーテリクならこんな行動をとるはずない。彼はむしり、こうしたことには奥手で何もできなかつたはずだ。

なのになんでこんなことになつてゐるの? いつものフレデイぢやない

なにかいつもと違うことが起ったに違いない。何、何がいつもと違つた??

(あ・・・・！・！・！)

そこで彼女のぐちゅぐちゅに乱れていた思考回路が一氣につながった。

（魔法薬だ！）

（さつきじぼれてしまつた魔法薬だ！）

床に転がるかわいらしい瓶の姿が記憶に浮かぶ。

この2週間、彼女が誠心誠意精製していたたしかあの魔法薬は

“惚れ薬”！！！

作っているだけならばそう強く意識するものでもなかつたが、たしかその效能は、飲んでから初めて目にした人物に好意を抱く、とうものであつたはず！

つまり、フレデリクは、あの惚れ薬を飲んでそのまま最初にアンジエリー力を目にてしまい、彼女に強い好意を抱いてしまつたのだ・・・・・！

発作もあつたし、薬液があれだけこぼれていた状況を見て、フレデリクは惚れ薬を口にしていなかつたという先入観を無意識のうちに創り出してしまつたらしい。

こうしちゃいられない、早く解毒薬を作らなければ・・・・！

「アンジエリーか？」

再び名前を呼ばれ、アンジエリーかはつとして顔を上げた。

そこには、抱きしめられてるというだけあって、予想以上に距離の近いフレデリクの顔が！

「いい～やああああああ～つづつ！――！」

思いつきり放たれた彼女のアッパー・カットが、フレデリクの顎下に直撃した。



### 第3回（後書き）

アンジエリーカは、甘い言葉に対する免疫が皆無です（笑）

\* \* \* \* \*

「それからすぐ、解毒薬をつくろうとしたんだけど・・・。あ、惚れ薬の場合、その元となつた惚れ薬を使えば解毒薬が作れるんだけどね。

瓶に残つてる2、3滴じやフレデリクをすこし落ち着かせることくらいしかできなかつた。

それで、薬の納付の期限もあるし、少しでも早くアイツを戻したかつたから、その日のうちに村を出てきたのよ」

説明をする高い声が、空に溶けては消えていく。

アンジエリーカは簡単に「村を出る」の一言で済ませたが、その「出る」という行為に実は大変な労力が必要だつた。

薬のせいで、いつもと様子が異なるフレデリクをみんなに見せるわけにはいかなかつた、というより見せたくなかつたため、なるべく人目につかないよう行動したからだ。

フレデリクを何とか説得し（彼自身は『自分は正気だ』となかなか納得してくれなかつた）、彼の家族に対して『少しだけ出かける』という内容の書置きを書かせて（薬の材料がどうしても早急に必要になつたため、手伝つてもらうことになつた、ヒウソではないが眞実でもない書き方をさせた）、荷物をまとめ（フレデリクの荷物は用意をあきらめて次の町で買うことにした）、馬車を借りて（夜になつてしまつていたため、貸し馬屋をたたき起こした）、最低限の休みだけで馬を夜通し走らせたのだ。

途中何度かフレデリクにも馬車の制御を任せたものの、いかんせん寝不足で疲労がたまつてゐる体では、体力の限界に近かつた。

フレデリクについても、惚れ薬のことをきちんと説明して納得はしてもらつたのだが、やはり魔法薬の威力は絶大で、自制をしてもらつてはいても時折じけらに向けられる熱っぽい視線がジリジリも居心地が悪い。

翌日、3つ隣の町でやつと宿をとることを決めたときには、疲れと緊張の糸が切れたことで、アンジエリーカは泥のように眠りに落ちてしまつたのだった。

\* \* \*

「本当にうこの村は通り過ぎるはずだつたんだけど・・・」

「ここまで行程を回想してしまつたアンジエリーカは、一度はパナに向けていた視線を下に下げる小さくため息をつく。

「聞けば、ここからパキラ山へ続く道が、土砂崩れで通行できないって言うじゃない。

せつからくここまでとばしてきてたつていうのに、足止めよ？足止め。村の人に聞いても、通れるようになるのに1週間はかかるつていうし、私たち、いつたい何のためにここまで急いだの、つて感じじゃない？」

馬を休ませようと立ち寄った際に、村人にその話を聞いたのは今日の午前中のことだ。

あまりのショックに、思わずその相手につかみかかつてしまつたのは仕方がないことだと思つ。

「いつじてる間にも、魔法薬の納付の期限は迫つてきりやつし、フレデリクの自制心だつてそろそろ限界だし。

いつそ山を回り込んで反対側に行こうかとも思つたけど、それじゃあもつと時間がかかるつちゃうらしくつて……。

何かしよつにも手詰まりなのよ。もう、私、いつたいどうしたいの?！」

ため息混じりに吐き出すアンジュリーカ。

頭を抱え込んだ彼女の顔が、背の低いパナにはぼつちり見えてしまい、すこし居心地が悪く思つた。

パキラ山脈の名前の由来ともなつたパキラ山が先日の大雨で土砂崩れを起こしたことは、この村の住民なら誰でも知つてゐる。パナみたいに、あまり村から出ない者なら特に不自由しないので「大変だな」程度にしか考えていなかつたのだが、こつしてその影響をもろに食らう者がいよつとは。

こつして足止めされてしまつたアンジュリーカを田の当たりにし、「早く道がつながりますよ」こと願うばかりである。

「通り言い切つて落ち着いたのか、アンジュリーカは、「ごめんなさいね。こんなこと言つちやつて。」とばつの悪そうに言つた。

「でも、いついうわけなのよ。

道がふさがつちやつて、どうにもこいつにもお手上げ状態。

それで、どうしようもなくなつて、ひとまず計画を立て直そつてパナちゃんのところの宿屋にきたつてわけ」

それからには顎頭の部分に床る。

アンジエリーカは、「あ～あ。」とスカートのすそを払つてその場にしゃがみこんだ。

パナの住むこのミネソタ村は、パキラ山の麓ふもとにあり、その雪解け水と山の幸の恩恵を受ける豊かな村だ。

背の高いその山の姿は、村のどこからでも望むことができるといわれ、村のシンボルにもなつてゐる。

今いるこの庭からもパキラ山を見ることができ、その雪の積もる頂いただを眺めながら、「せつかく田の前まで来てたのになあ・・・」と悔しそうにつぶやいた。

「目的ついでにじだつたんですか？」

パナの質問を聞いて、アンジエリーカはしゃがんだまま頭をおとした。

「パキラ山よ？

あの山の中腹にある谷のところに、月下草が群生するつて本で読んだことがあるの」

だから足止めが余計に悔しくつて、とつぶやくアンジエリーカ。

そうなのだ、土砂でダメになつているといふその道さえ越えることができたら、後は探して作るだけだ。月下草は見つかりにくいかもしれないけれど、群生と言つからにはそれなりに数はあるのだらう。やつしたら、あとはフレデリクにも手伝つてもらつて、必要量…

「アンジエリーカさん、それなら大丈夫かも知れません！」

愚痴るようにつらつらと流れた思考が、パナの大きな声によりさえ

ぎられた。

「え?」

「あるんです、パキラ山へ行く道!」

パナの言い切った言葉にアンジョリーカは面食らつ。

「え、だつて、道が通行止めだつて・・・」

「それは、馬車が通る道なんです。馬車が通れるよつな、しつかりしてて、一定の道幅がある道のほうは土砂崩れで埋まつてしまつたんですけど、私たち村人が木の実とかを探るときに使う細い方の道は、普通に通れるんです。」

だから、土砂崩れをしたと聞いても、特別生活が不便に感じる」とはなかつたのだ。

アンジョリーカの話を聞いて、田的地が山を越えた向こうにあるのならそれはどうしようもないと思つたのだが、山自体が目的なら話は別だ。

要是ここから徒步で登つていけばいいのだ。歩きのため、馬車よりは移動が大変になるが、急ぐことを優先するのならば何も問題はない。

「・・・それを使えば、山までいける?」

「はい、いけます! 村のおじさんたちが、土砂崩れがあつてすぐ確かめに行きました」

「・・・その道つて、私たちでも登れそう?」

「はい! 途中道がフクザツでわかりにくいですけど、私も何回も登つたことがあるので大丈夫だと思います」

「・・・山道にでるのに、どれくらいかかる?」

「ええ・・・っと。歩きなので時間はかかりますけど、道としての

『それむしの馬車の道よつは短いと思こますよ?』

ポツリポツリと聞いていたアンジエリーカの声に、次第に力が入つてくる。

「本当…? 本当なのね、パナちゃん!」

パナとのやり取りののち、アンジエリーカは顔を輝かせて立ち上がつた。

パナは力強くうなづく。

アンジエリーカは喜びのあまり「ありがとう〜〜〜〜」とパナをギュッと抱きしめた。

「ふみゅ〜〜苦しいです〜」

「あ、『めん』『めん』。でもありがとうパナちゃん!」

わーい、わーいと喜ぶアンジエリーカ。

パナの手をとつてぴょんぴょん飛び跳ね、にこりと笑つたその顔は、急に年齢を落としたように無邪気に映る。

その笑顔が本当に嬉しそうで、同じくぴょんぴょんと飛び跳ねながら、パナは「よかつたな」と心の底から思つた。

「あ、アンジエリーカ。こんなところいたんだ。」

喜びに踊るひよひよ姿を現したのがフレデリクである。

「頼まれたものは全部買っておいたよ。いま、部屋におこにあるか

ら・・・ってビュンしたの？何かすゞく嬉しそうだけど

こちらに向かって歩いてくるフレデリクに、アンジェリーカは興奮もそのまま駆け寄っていく。

「フレデリク！ 聞いてよ聞いて！

今、パナちゃんから手がかりにならそうな話を聞いたのよー。」

嬉しそうなアンジェリーカ。

「手がかりって、あの山に行く？」

そうやって視線をパキラ山脈に走らせる、アンジェリーカは「そーー！」と首を大きく縦に振った。

「パナちゃんが言つにはね、村の人たちが使う細い抜け道みたいなものがあるんですって。

それを使えば、あの土砂崩れの道を通り抜けて、目的の谷までいけるかもしれないのー！」

しかも思つたよりも早く、これでやつと薬が作れるわーー！

嬉しさを抑えきれず、パナと同じように手をとつてびょんびょん跳ねる。

一時は計画が折れて中断しなればならなかつたこと。

パナにはあえて言わなかつたが、土地を治めている貴族との契約を破れば、信用を失い、下手したら領地追放だってありえたかもしれないのだ。

それも、駄目かもしれないとあきらめかけた状況のなかで、事情も事情だつたために、精神的にもかなり追い詰められていた。

それが、幼い少女の言葉のおかげで不意に希望の光が見え始めたのだ。

立ちはだかっていた壁が取り除かれ急に道が開けた気がして、その喜びもひとしおなのである。

「それもこれも、ここにいるパナちゃんのおかげよつ」

パナに繰り返し感謝の気持ちを伝えようとして、体をひねった。振り向いた先で視界の中に映つたパナは、「あちゃ～」と、何かを言いたそうな顔をしている。

「パンちゃん？」

その表情の意味がわからず、アンジェーリーカはさらに体を向けよ

が、うまく体が回らず、その原因を見るために、原因と思われる下にふと視線をおろす。

・・・つないだ手と、そのつないだ相手の顔が見えた。

「アンジェリーカ。君のその笑顔もかわいいな」

フレデリクがにっこり笑う。

フレデリクに連れて行かれたアンジェエリーがどうなつたかは、薪

を催促されてお手伝いに戻ったパナにはわからなかつた。

## 第4話（後書き）

アンジエリーカは、夢中になると周りが見えなくなる癖があるよう  
です（苦笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2927f/>

---

悩める少女と魔法薬

2011年10月5日06時25分発行